



卓 話



「米山奨学生報告」

米山奨学生 孫 君美さん

—学生時代やって

楽しかったこと—

★徐州師範大学

学生ボランティア組織に参加し、在学する2年間月2回障害児童の福祉施設への訪問を続けて行いました。子供たちにお菓子をあげたり、大学を案内してあげたり、新しい図書を買うために募金をしました。



★北陸大学

学校で選ばれて、石川県の日タイ友好交流プログラムに参加し、タイへ友好訪問しました。主な内容として、ナコンタマラート県で当地の高校生の家でホームステイをして、地元の学校に本を寄付したり、学生たちと一緒に記念樹木を植えたり、石川県の代表として現地の人といろいろな友好交流を行いました。

—私が感じた日本と中国の違い—

中国と日本は隣国で、顔つきも似ていますし、日本の文化は中国から大きな影響を受けたので、似ている点も多いかもしれませんが、実はいろいろなところに差異があります。

まず服です。服は人の性格を側面から表していると思います。日本人は組み合わせの美と調和を求めているように思います、中国人は実用性を重視します。気温の差があるかもしれませんが、東京の冬はかなり寒いと思っています。しかし日本の高校生や小学生は、大変薄着なのでびっくりしました。若い女性の薄着は理解できますが、小学生も薄着でいる事は理解できませんでした。中国では冬に入ったら、皆がダウンジャケットを着て、厚着で過ごします。また、日本は伝統的な服装として着物があり、結婚披露宴などの正式な場合に着ることが多いです。中国の正装はチャニーズドレスを思い浮かべるかもしれませんが、中国は多民族の国なので、民族ごとに特色ある伝統的な服装があります。その為正式の場合、男性はスーツ、女性は普通のドレスを

着ます。

次は食です。日本人は刺身が好きですが、中国人はだいたいのが、火を通した熱い食べ物が好きです。「色、香、味」を持っている料理は最高だと中国人は昔から考えています。私が初めて日本の食文化を体験するため、寿司屋さんへ行ったことがあります。刺身、貝柱など、値段が高くても、注文する人が多かったです。私は残念な事に生物が苦手で、その美味しさが理解できませんでした。また、日本料理に対してはさっぱりしたイメージを持っていますが、中華料理は大体脂っぽく、濃い味をしています。同じラー油でも、日本のはあまり辛さを感じられません。日本の中華料理屋さんでは定食メニューがありますが、中国の普通のレストランでは一人前のセットメニューはほとんどなく、1品の量が日本に比べてかなり多いです。日本のラーメン屋さんでは、ラーメン、餃子、チャーハン等の3品セットが多いですが、中国では単品でお腹一杯になりますので、多くても2品位しか頼めません。初めてラーメン屋さんへ行った時、ラーメンとチャーハンがセットになっている事にびっくりしました。中国ではラーメンもチャーハンも主食なので、一緒に食べる事は殆んどありません。そして、同じマクドナルドやケンタッキーでも中国と日本のメニューがだいぶ違います。中国に進出している外食チェーン店には中国独自のメニューがあります。中国の「吉野家」ではケーキセットがあります。

家は誰にとっても大事な物だと思いますが、日本人は部屋の間取りを追求し、中国人は一般に大きさにこだわると思います。中国人は家を買おうとする時、最初に「大きさは何平方メートル？」と不動産屋に聞きます。日本人にとって土地付き一戸建てが生涯の夢であった時代が長く続き、街全体の景観より、小さくても独立した一戸建てが多くの人々の夢だった事をテキストで知りました。中国の特に都市部では、マンションを買うために一生懸命仕事をしています。近年、土地価格の高騰によるマンションバブルが起こり、上海の例を挙げると、2009年の統計データより、上海の平均年収は約47000元（60万円）ですが、調査年度のマンション成約平均価格は一件当たり203万8000元（約2700万円）に達し、マンション価格は平均年収の45倍もありました。中国人にとって、都市部で土地付き一戸建てを持つ事は不可能です。ついでに、今の段階では中国はまだまだ

貧富の格差が大きく、中国の総人口の2割に当たる貧困層が獲得できる富は、富全体のわずか4.7%に過ぎませんが、同じく総人口の2割にあたる富裕層が富全体の50%を獲得しています。中国において貧富の格差が最も小さいのは浙江省で、格差が一番大きいのは貴州省です。浙江省では一般庶民による起業・創業が多いので民間企業の数が多く、中流階級に属する人が多いのです。逆に貴州省では民間企業の数が非常に少ないのが現実です。ある経済学者の調査分析によると、中国の貧富格差の大きな原因は二つあり、一つは中小企業の発展が不十分で、中流階級の人々が少ない事。二つ目は第一次産業における収入が少なすぎる事、および第三次産業の発展が不十分である事だと指摘されました。中国の『貧富の差』を解決する基本的な構想としては、農民を農業分野から脱出させると同時に中小企業を発展させ、多くの人に就業機会を提供する事だと一部の経済学者たちは主張しています。

最後は交通です。日本にきて移動の便利さが深く感じられました。近い範囲内の移動は地下鉄に乗ればどこにでも行けますし、やや遠い所へはJRを利用すればすぐつけます。しかし中国の場合、上海や北京のような大都市以外では、地下鉄はまだ普及していません。

また、日本の携帯電話事情を知らないまま日本に来てしまいましたので、携帯の申請をする時に、中国と異なる形式でかなりびっくりしました。日本ならば携帯電話の本体と契約する電話会社は2つで一組になっていて、例えばドコモの携帯電話にドコモのサービスを使います。中国の場合は「SIMカード」というカードを携帯電話の本体に差し込んで使うので、携帯電話本体とサービスは分離されています。手順として、まずは携帯電話の本体をショップで購入し、その後で好きな電話会社を選びます。同じ携帯本体で、違う電話会社間で乗り換えなども可能です。電話番号がついてきますが、最後が4や9などの番号は、中国でも不吉な数字とされ、かなり安い値段で販売されています。

—東日本震災復興プロジェクトのボランティア活動—

今月の12日～14日に早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンターの震災復興ボランティア活動に参加し、宮城県名取市閑上地区で鎮魂灯籠流しの手伝いをいたしました。12日の夜12時に学校からバスで出発し、13日の8時に閑上中学校に到着して夜11時半まで手伝い作業をし、夜12時に現地から出発して14日の朝に学校に戻りました。気温が高く、長時間作業で本当に疲れましたが、とても遣り甲斐のある活動だと思っています。

かつては「活気のある漁港」だった人口7000人の宮城県名取市閑上（ゆりあげ）の町は、巨大な津波によって地図上から姿を消しました。約1,000人の人が亡くなり、普通毎年8月の中旬ごろ閑上火火が大きな行事でした。名取出身の観光振興委員会の執行委員長は「今年こそ、この行事をやります」と、被災地の人々を慰めるためいろいろ努力しました。以前の行事は花火が中心でしたが、今度は鎮魂灯籠流しを中心に

し、被災地の人を喜ばせるため、副イベントとして花火も打ち上げました。この行事はいろんな団体からの寄附で、開催することができました。寄附をしていた団体の中で名取市ロータリークラブの名前も見ました。それを見た時、私は自分もロータリーの一員としてロータリーと一緒にこの行事のサポートをしたと思いました。

13日は閑上中学校のグラウンドでいろんな催しが開催され、飲食チェーン店はブースを出し、安い値段でおいしいものを現地の人へ届け、私たちボランティアは行事の手伝いを通じて、被災地の人々に笑顔と元気を伝えました。臨時に組み立てられた舞台で閑上太鼓も演奏され、太鼓の音を聞いて、目が赤くなった人も見かけられました。懐かしい思いがわいてきたのでしょうか。手伝いの作業内容は、午前は灯籠の組立て作業や夜の点灯準備作業をし、午後からは来場者の誘導を担当いたしました。暑かったですが、皆一緒にやりましたから、楽しかったです。お昼に、現地の委員会の人から冷たいお水を頂きました。行事会場となる閑上中学校では蓄電機械による限られた電力しか使えず、扇風機すら使えませんでした。現地へ行く時、現地の人に迷惑をかけないため、お水と食べ物は全部自分で持って行ったのですが、そこで冷たいお水を頂き、本当にありがたく思いました。午後は気温がより高く強い日差しの中で、自分が担当するスポットにずっと立って、来場者を誘導しましたので、汗びっしょりで足が疲れました。でも、私の前を通過する人々に「こんにちは」と挨拶すると、向こうから「こんにちは」とか「ご苦労さん」などと返事して下さる人がいっぱいいました。その時は本当に楽しかったです。又一面に液晶テレビが数多くつけてあるバスが止まっていました。そのバスはジブリ製作室やディズニー等から著作権を与えられ、被災地の子供たちにアニメや映画を見せるために作ったものだと聞いて、私は日本人の素晴らしさと優しさに深く感動されました。

大震災の後、両親を安心させるために一時帰国したので、被災地の人が一番苦しい時期に何もしてあげられなく、本当に申し訳ないと思っています。自分が一人で日本にきて留学している間、学校の先生や奨学金団体、バイト先の担当者など多くの日本人が支えてくれました。大震災が起こり、被災地の人へ自分ができる範囲で何かしてあげたいと思い、夏休みにこの震災復興ボランティア活動に参加しました。両親からも大きな賛成が得られ、「気をつけて行ってください」と言ってくれました。今度の活動は地震発生直後のボランティア活動と比べて本当にたいしたことはありませんが、被災地の人に自分の気持ちが伝えられ、本当に良かったと思います。被災地へ少しでも自分ができることをしてあげられ、とてもうれしかったです。

今後は自分が留学期間を通じて培った語学力、専門知識や異文化に対する理解力などを活かして、日本と中国のかけ橋になるような役割を果たしたいと思います。